

【翻訳】

目的と幸福に関する考察

岡 部 勉

SOME REFLECTIONS ABOUT ENDS AND HAPPINESS

Tsutomu OKABE

要旨

Paul Grice, *Aspects of Reason*, edited by Richard Warner, Oxford : Oxford University Press, 2001 の最終章（第5章）の前半部分を翻訳したものである。この章は理性論である *Aspects of Reason* の結論部を構成するものであるが、そうになったいきさつについては、*Aspects of Reason* に付された編者 R. Warner による Introduction, xxxvi に詳しい。理性論は価値論（P. Grice, *The Conception of Value*, edited by Judith Baker, Oxford : Oxford University Press, 1991 参照）に直結しているということを、グライスはこの章で示そうとしている。

キーワード：目的、幸福、エウダイモニア、価値、理性、形而上学、グライス、アリストテレス

[以下は、Paul Grice, *Aspects of Reason*, edited by Richard Warner, Oxford : Oxford University Press, 2001 の最終章（第5章）の前半部分を翻訳したものである。^{*1} 後半をいっしょにすると長くなりすぎるので、今回は前半だけにした。この章が理性論 *Aspects of Reason* の結論部を構成することになったいきさつ（これについては、*Aspects of Reason* に付された編者 R. Warner による Introduction, xxxvi 参照^{*2}）は別にして、理性論は価値論（P. Grice, *The Conception of Value*, edited by Judith Baker, Oxford : Oxford University Press, 1991 参照）に、完全に連結しているということを、この章は示そうとしていると思われる。それにしても、グライスの文章は、中身は十分すぎるほど濃厚なのだが、とにかく容赦なく素っ気ない。少しでも分かりやすくするために多少は工夫をしたつもりだが、理解が容易でないところが、部分的には残ったかもしれない。訳語はできるだけ統一しようとしたが、最終的にはこだわらないことにした。この翻訳は2年前の読書会の成果である。この4月で6年目を迎えようとしている読書会に根気よくつきあってくださっている、長友敬一、吉田李佳、渡邊淳子の各氏に、ここに改めて謝意を表す。]

I

私が選んだ論題は、徹底的、組織的、かつ完全に理論的な取り扱いに、すぐれて値するものです。このようなアプローチには、「欲する (want)」という語によって表わされるかもしれない、しばしば微妙に異なる何種類もの欲求の様態に関する慎重な分析と、異なる種類の欲求が合理的（かつ非合理的）な生き物の心理的装置において果たす役割に関する包括的な考察とを、伴うことになるだろうと私は思います。そういった種類の問題に言及することを私は望んでいるのですが、そのような種類の分析を試みる立場に、自分自身が確かに位置しているとは思いません。いずれにしても、この分析は、非常に時間のかかる仕事になるでしょう。そこで、私の議論に方向性を与えるためにも、また、許容できる範囲に議論を収めるためにも、『ニコマコス倫理学』においてアリストテレスがこの論題を取り扱った仕方から生じる幾つかの問題に、議論を関連づけることにしましょう。『ニコマコス倫理学』のような、過去の偉大な著作が置かれるべき適切な場所というのは、博物館ではなくて、哲学的な議論の場であると私は信じているのですが、私がとる以上のような手続きは、そういう考え方を強調するという付加的な利点を持つかもしれません。

私が問う最初のアリストテレス的な問いは、「人間にとっての善」と認められ得るどんなものによっても満たされなければならないとアリストテレスが考える、二つの条件に関わるものです。^{*3} 『ニコマコス倫理学』第1巻第4章のはじめの部分で、アリストテレスは、人間にとっての善はエウダイモニア（「幸福」と訳してもよいかもしれませんが、そうでないかもしれません）と同一視され、そして次に、そのエウダイモニアはよく生きること及びよく行為することと同一視される、と記しています。しかし、エウダイモニアについては、それ以上のより詳しいどんな説明に関しても、幅広い不一致がある、と述べています。第1巻第7章でアリストテレスは、二つの特徴、究極的な終局性（無条件の終局性）と自己充足性の詳細を述べることによって、人間にとっての善とエウダイモニアが同一であることを確認しようとしています。これら二つの特徴は、人間にとっての善とされ得るすべてのものに要求されると同時に、エウダイモニアによって満たされるものでもあるとされます。「究極的な終局性」は以下のように定義されます。「それ自体として追求するに値するものは、他の何かのために追求するに値するものよりも、より終局的であると私たちは言う。また、（それ自体として望ましいものであって）他の何かのために望ましいものでは決してないものは、それ自体として望ましく、かつ他の何かのために望ましいものよりも、より終局的であると言う。従って、常にそれ自体として望ましく、かつ他の何かのために望ましいということが決してないものを、私たちは無条件に終局的であると言う。」エウダイモニアは、この条件を満たすと（直観的に）思われます。名誉とか快樂、理性、美德（人間にとっての善やエウダイモニアと同一視され得る、最も一般的な候補）といったものは、実際、それ自体のために選択されます（そこから何も生み出されなかったとしても、それらは選択されるに値するでしょう）。しかし、それらはまた、エウダイモニアのためにも選択されます。なぜなら、「私たちはそれらによって幸福になると判断する」からです。しかしながら、エウダイモニアは、それ自体以外の何かのために選択されることは決してありません。

幾つかの前置きの後、ここでの「自己充足」の適切な意味が次のように定義されます。「自己充足的なものとは、それだけであっても、人生を望ましく、欠けるところが何もないようにするものであると、ここで私たちは定義する。」エウダイモニアは、この条件をも満たすように思われます。そし

てアリストテレスは、エウダイモニアは、「多くのよいものの中の一つのよいものと見なされることのない、あらゆるものの中で最も望ましいもの」であると考えられるという、恐らくは重要なコメントを付け加えています。アリストテレスの見解では、他のいかなる善が付加されることによっても、エウダイモニアの所有を改善することはできないということは、単に真実であるというだけではなく、エウダイモニアは特別な種類の善である、すなわち、他の善と並べて置くことが不適當であるような善なので、そのことは真実であるということ、この付言は示すものであると解されるかもしれません。

『ニコマコス倫理学』のこの箇所は、私の考えでは、幾つかの問いを生じさせます。

(1) アリストテレスはエウダイモニアを、究極的な終局性という条件を満たす唯一のものであると考えていると、通常、注釈者たちは想定しているのではないかと私は思います。しかしながら、この唯一性についての主張は、この箇所でも（あるいは、私が思い出すことができる限りで、他の箇所でも）明確になされてはいませんし、もし明確に主張されたとしたら、それは正しい主張なのかどうか、私にははっきりしません。例えば、日なたでのらくらすることは、それ自体のために望まれるもの、望ましいものですが、それはしかし、何か他のもののために望ましいものではない、幸福のために望ましいものではない、ということはないのでしょうか。もし、それ自体のために望ましいもの（I-望ましいもの）として分類されるものの中には、エウダイモニアのためにも望ましいもの（H-望ましいもの）とそうでないものという区別があるということになった場合には、（まさに）H-望ましいものであるようなものを区別するための何か共通の特徴があるのかどうか、また、もしあるとしたら、それはどのようなものであるのか、という別の問いが生じます。この問いは後でもう一度登場してくるでしょう。

(2) アリストテレスは、名誉、理性、快樂、そして美德はすべて、I-望ましいものであり、かつH-望ましいものであると主張します。しかし、『ニコマコス倫理学』のこの段階では、これらは、エウダイモニアと同一視され得る候補として、まだ除外されてはいません。そして実際、アリストテレス自身は後に、そのうちの一つについての特別な解釈（形而上学的な観想）を、少なくとも何らかの仕方で、エウダイモニアと同一視しています。^{*4} 以上の候補のうちの一つ（例えば、名誉）がうまくいくと証明されることになる、と仮定してみましょう。この場合、アリストテレスは、名誉はそれ自体のために望ましいと同時に、名誉以外の何かのために、すなわち、エウダイモニアのために、つまり、名誉のために、望ましいと主張していることにならないでしょうか。その上また、この表面上の不整合は、「—は望ましい」の文脈的な非外延性に訴えることによって排除できるのかどうか、明確ではありません。なぜかという、「AはBのために望ましい。BとCは同一である。それ故に、AはCのために望ましい。」という議論の形式は妥当なものではないかもしれませんが、「AはBのために望ましい。必然的にBとCは同一である。それ故に、AはCのために望ましい。」という議論の形式が妥当なものではないということは、決して明らかではないからです。ですから、もしエウダイモニアが名誉と同一視されるということが真だとしたら、恐らくは、それが非偶然的な真理である場合でしょう。

(3) 以下のように仮定してみましょう。(a) ゴルフをすることとテニスをすることは、それぞれが、I-望ましいものである。(b) それぞれは、それ自体がI-望ましいものである身体的健康

のために有益である。(c) ゴルフを毎日1ラウンドか、テニスを毎日何時間かするのが、それぞれ、身体的健康を最高の状態にするために十分である。そして(そうしてよければ、話を簡単にするために)、(d) 身体的健康のための、第三の道は存在しない。さて、XとYの二人は以上すべての仮定を受け入れて、Xは毎日ゴルフをし、Yは毎日ゴルフとテニスの両方をしてしているとします。まず第一に、これら二人の紳士のスポーツ活動のすべてが、それ自体のためにも、また身体的健康のためにも、なされているということは、極めてありそうだとということ、第二に、Xにはありませんが、Yにはテニスができるという価値があるので、(その分だけ) Yの生はXの生よりも望ましいということ、この二点を否定することは難しいと思われまます。Yの生において身体的健康の程度が過剰なものになるという事実は、彼が身体的健康のためにゴルフとテニスの両方を追求することを否定するための根拠になるには思われまます。しかし、もし私たちがそのことを否定することを望むとしたら、私たちはある場合に、次の答えようがない問いとあたかも向き合うことができるようになります。すなわち、「もし彼が身体的健康のためにそのどちらをも追求めることはしないとしたら、彼は身体的健康のためにそのどちらを追求するか」という問いです。

次に、もし私たちが身体的健康への言及を、エウダイモニアへの言及に置き換えた場合の例を捜し求めるとしたら、上の例にどれくらい近いものを構成できるか考えてみましょう。私たちは、XとYの二人が、以下のことを共有していると考えてみてもよいかもしれません。すなわち、すぐれた学究生活を送ってきたこと、家族が満足すべき状況にあること、健康であること、裕福であること。また、次の点も共有しているとしましょう。彼らは、自分たちのそういったあり方の諸相を、それら自体のために評価している。しかも、正しく評価している。そして、それらが自分たちのエウダイモニアに貢献すると見なしている。両者はそれぞれ、自分を完全に幸福な人間だと見なしています。しかし、Yはその上、Xとは異なって、詩を作っています。それは、彼が関心をよせている、そして、自分のエウダイモニアに貢献する何かとして考えてもいる活動です。Yが詩作りの努力にささげている時間を、Xは特に何もしないで、家でぶらぶらして費やしています。さて、私たちは、Yの生涯には、Xの生涯には含まれないそれ自体として望ましい要素、詩作という要素が含まれるということ、それと、Xの生涯に含まれていてYの生涯には欠けている、別の釣り合いをとる要素は存在しないということ根拠として、Yの生涯はXの生涯より望ましいかどうかという問いを提起することにしましょう。

考えられる一つの答えは、次のようなものでしょう。すなわち、Yの生涯は、付加的な価値を含んでいるので、Xのそれよりも本当に望ましい、しかし、この事実は、それぞれは自分は完全に幸福だとみなしているという想定に従って、どちらの生涯もエウダイモニアの点で対等であるということと矛盾しない、というものです。もし私たちがそう答えるとしたら、私たちは実際には、エウダイモニアはその適切な意味において自己充足的であるという、アリストテレス的な考え方を退けることとなります。しかしながら、そう答えない適切な理由があると私には思われまます。これまで注釈者たちは、「エウダイモニア」という語の正確な解釈について意見を異にしてきましたが、私が知る限り、私が最大限もっともらしいと考える推測と同じくらいもっともらしい推測を示す人はいませんでした。すなわち、「エウダイモニア」は、人のよきダイモン(守護霊)がその人に(もしそうすることができるとしたら)保証する、状態とか状況の名前として理解されるべきであるという推測です。ですから、私のよきダイモンは、私に関して、ひたすら私のよくあること(well-being)とか幸福に対する関心によって動機づけられた存在です。言い方を変えれば、「エウダイモニア」は、常勤職の、邪魔だ

てされることのない、妖精的な代理母が、あなたに保証するものに関する、一般的な特徴づけのことです。アリストテレスがおもしろくも何ともなく正しいと見なした、「エウダイモニア」とよく行為すること及びよく生きることとの同一視は、今や必然的な真実のように見えはじめます。もし「エウダイモニア」のこの解釈が（私が図々しくそう仮定するつもりであるように）正しいとしたら、XとYは、エウダイモニアの点において対等なのだが、Yの生涯はXの生涯よりも望ましいということは全く不可能でしょう。何故なら、その場合には、一方で、両者は等しくよくあるとしながら、他方で、Yの方がXよりもよくあるとすることになるからです。

他にもさまざまな答えが可能です。Yの生涯はXのそれよりも望ましいだけでなく、YはXよりもエウダイモンである（よりよくある）と言われるかもしれません。この意見は、エウダイモニアとよくあることとの間の、先に提案された概念的な関連性を保持していますし、また、人の生涯にある価値が付加されると、（恐らくは、その生涯を送っている本人がどう考えるのであっても）その生涯の価値を高めるといふ、完全に不当とは言えない原則に基づいています。そのような原則は、それがより完全な形で表明された場合には、ある特定の生涯において実現されるH－望ましい要素の合計された価値におけるどんな増加も、その生涯によって証示される幸福とかよくあることの度合いの増大に、一定の割合において反映されるということ、主張するあるいは含意するものである、そう人は考えるかもしれません。あるいは、もっと用心深く、幸福の増大は一律の比率で決められるものではなくて、それはむしろ、限界効用逓減現象に類似した何らかの仕方で決められる、と人は考えるかもしれません。^{*5} 私は、本章の議論は次のような考えを慎重に否定することへと導くものであるとみなしたいと思っています。すなわち、特定の人における幸福の度合いは、どんな関数が示唆されるにせよ、その関数のアーギュメント（変数、定数）が示すものはその人の生涯において実現される特定のH－望ましいものの量的な大きさであるというような、そういう関数の関数値であるという考えです。しかし、今のところは、この考えの最も粗雑なバージョンについて、それがどのようなものであってもその受容可能性に疑いを投げかけることで十分でしょう。XとYのケースに戻ることにして、私たちがXの生涯あるいはYの生涯の望ましさについて話をするとき、私たちが話をしている望ましさというのは、その生涯がその人のものである、その本人の観点から見た、その生涯の望ましさである、と私には思われます。それ故に、例えば、自分のことを「完全に幸福である」と考えて、だから、詩作りが新たに織り込まれても、よりよくあるようにも幸福にもならない（恐らくは、より完全なものにはなるが）と考えるXは、もし詩作りが自分の営みに付け加えられると自分のよりよいあり方がどのようになるかに関して、誤った評価をしている、と想定するのは直観に反している、と私には思われます。それにまた、もし幸福の追求が、生きることの固有の目的であるとしたら、あるいは、固有の目的の一つであるという場合ですら、ある生涯にもう一つH－望ましいものが追加されて実現されることは、自動的にその生涯の所有者が幸福とか幸せを増大させることになる想定することは、私個人としては幾らか魅力に欠けると考える、ある倫理的な立場に荷担することになるでしょう。つまり、余りに抑制を欠いた幸福拡張論を支持する立場に立つことになるでしょう。

もっと魅力的な立場は、いま問題にしている例に関して、限界効用逓減現象に類似した何かではなくて、限界効用消失現象とも呼ぶことができるような何かを思い浮かべるべきである、と想定することでしょう。すなわち、Yの生涯はXの生涯に欠けているあるH－望ましい要素を含んでいるとしても、XとYは等しく幸せであり等しく幸福である、あるいは、少なくともそうかもしれないと想定

することです。そして、ある時点で、言わば幸福のパケツが一杯になって、その上さらにH-望ましいものをいくら実現して注ぎ込んでも、その中味にどんな影響も与えないと想定することです。この立場は、私が先に、身体的健康の場合にあり得る過剰決定に関して採用した見方に類似したものでしょう。しかし、仮にこの立場が正しいとしても、本当に興味深い仕事はまだなされずに残っているということが承認されなければなりません。それは、H-望ましいものの特定の組み合わせを実現することが、幸福のパケツを満たすのに十分であるのかどうか、それを決定する条件を特徴づける仕事のことです。

そうすると、ここまでの議論の主要な帰結として、探究されるべき二つの問題が提起されたということになります。第一は、単にI-望ましいだけであるものと、I-望ましいだけでなくH-望ましくもあるものとを、区別する可能性（という問題）。第二は、ある生涯によって証示される幸福の度合いは、その生涯において実現されるH-望ましいものの組み合わせによって、過剰に決定されるかもしれないという可能性、及び、そのような過剰決定を左右する条件を特徴づける必要性（という問題）。

(4) 別の方向に向かうことにしましょう。幸福と幸福への手段に関する望ましさのあり方の違いについて、アリストテレスは二つの主張に与したと、私は既に述べました。次の二つの主張に、私は異議はありません（あるいは、少なくとも、異議を唱えるつもりはありません）。

(A) あるものは、I-望ましいものであり、かつH-望ましいものでもある（それ自体が目的であり、かつ幸福への手段でもある）。

(B) 幸福はそれ自体が望ましいものであるが、それ以外のどんな目的のためにも望ましいものではない。

もう一つの主張(C)が真であるかもしれないという可能性を、私は示唆しました（それが真であるとは主張しませんでした）。つまり、

(C) あるものは、H-望ましいものではないが、I-望ましいものではある（そして、何か他の目的のために望ましいものであるということも、恐らくはない、と人は付け加えるかもしれませんが、その場合には、幸福は、何か他の目的のために望ましいものではない、唯一のものではないということになります）。

しかし、真であるだけでなく、重要でもあると私が見なしたいと思っている、まだ言及されていない主張が、他に二つあります。第一は、

(D) どんな直接的にH-望ましいものも、I-望ましいものでなければならない。

そして第二は、

(E) 幸福は、I-望ましいもの（そして、もちろんそれはH-望ましいものでもある）の実現を通してのみ達成することができる。

主張(D)は、あるものが、I-望ましいものではないが間接的にH-望ましいものであり得る、ということを経容するでしょう。朝の腕立て伏せというのは、そういうものであるかもしれませんが、それは、(例えば)上手にクリケットをするという、それ自体が明白にI-望ましくもH-望ましくもある、そういうことのために望ましいものであるという場合だけでしょう。⁶ (D)に関連した主張、すなわち、(D')「あるものは、それがI-望ましいものであると、ある人Xが見なす場合にだけ、直接的にXの幸福に寄与する」は、大いに真でありそうだと、私には思われます。(D')だけで

なくて、(D) も真であるかどうかは、あるものが I-望ましいものであると（そういうことが可能であるとして）誤って思い込んでいる人について、その人はそう思い込んでいるものを実現することを通して幸福を達成すると、適切に言うことができるかどうかによるでしょう。極端な場合を例にとると、巧妙な仕方で他人を欺くことを I-望ましいとよこしまにも見なし、またそうすることに喜びを見出す邪悪な男が（そうする限りで）幸福を達成すると、適切に言うことができるでしょうか。アリストテレスは否定的に答えるだろうと私は思います。そして、私はどちらかというに彼に同調したいと思います。しかし、議論の余地が大いにあることは認めます。もし主張 (D) が真だとして、主張 (D) の一つの帰結は、幸福の薬（それを飲むことが直接的に幸福へと導く、そういう薬）はあるはずがないということでしょう。「いい気分」とか陶酔感に直接導くようなピルは、あるかもしれませんが（たぶん、あります）。しかし、そのような状態は、幸福と区別できるのでなければならぬでしょう。

主張 (E) は、幸福が本質的に従属的であることを含意するでしょう。幸福がただ生じることはあり得ません。幸福の実現は、それをもたらす一つまたは二つ以上の何ごとかの実現に依存しています。幸福は副詞的に考えられるべきでしょう。幸福であるとは、ある何ごとか x について、幸福つまり幸福を実現しつつ (with happiness) x することである。^{*7} そして、幸福の観念とよくあることという観念の間の互換性ないし近似的互換性について考えてみると、問題の副詞が評価的副詞であることが示唆されるでしょう。

現在の目的にとって、最後の二つの主張が重要だというのは、私が思うに、幸福のために選ばれる（望ましい）ものは、幸福への手段として選ばれる（望ましい）ものと考えられるという考え方について、今度は疑問が生じてくるからです。少なくとも、もし手段と目的の関係が、現代の哲学においてひどく頻繁にそう考えられているように思われる、そういう仕方で考えられるとすれば、そういうことになります。つまり、 x をすることないし x を生じさせることが y の発生を予定されたように引き起こす（生成させる、結果をもたらす）場合に、 x は y の手段であると考えれば、ということです。なぜなら、もし、それを実現することが幸福をもたらすようなものというの、上で言った意味で幸福への手段である、そういうものだとしたら、(a) それは何であれ、そういうものの発生の結果としてだけでなくそれ以外の仕方でも幸福は生じ得るということが、概念的には可能なはずで、また、(b) それ自体で望ましいものであることというような、ひどく非科学的な条件が、幸福をもたらすものであるための必要条件であるなどと想定することは、余りに困難になるように思われます。言い換えれば、主張 (D) と (E) は、直接的に幸福をもたらすものが、現在支持されているような意味で幸福への手段であるとする考え方を、排除するように思われます。

私が上で提起した論点は、最近アリストテレスの注釈者たちを二分することになった学術的な論争に、密接に関連します。争いは、アリストテレスはエウダイモニアを「支配的な (dominant)」目的として考えたのかそれとも「包括的な (inclusive)」目的として考えたのかという問題をめぐって、激しく戦わされました。これらの用語は、W.F.R.ハーディに由来するものだと思いますが、アクリルの最近の論文で提案されている、この問題の定義を引用することにします。^{*8}

「ある包括的な目的」というのは、二つ以上の価値とか活動とか何かよいものを結合するあるいは包括する目的を意味するかもしれない... 「ある支配的な目的」というのは、単一の目的、つまり、た

だ一つの価値ある活動とか何かよいものからなる目的を意味するかもしれない。¹⁾

以上の定式化に対する最初の反応は、他のこともあるでしょうが、恐らくは、「包括する」という動詞が包括的目的の特徴づけの中に出現するので、圧倒的な啓発とまではいかないでしょう。しかしながら、この欠陥は、これは目下の私の企ての範囲をはるかに踏み越えることですが、「包括関係」（あるいはむしろ、一群の包括関係）の本質に関する論理的・形而上学的探究によってのみ、適切に修復することができると思います。しかし、もう少し野心的にならずに、最初は、そして暫定的に、包括的目的というのを一組の目的から成るものとして考えることにしましょう。もし幸福がこの意味で包括的目的だとしたら、私たちは、前の節で示した特徴の幾つかを説明することができます。もし幸福を構成する一組の目的が空集合でないとしたら（これは、楽観的だとしても、合理的な仮定でしょう）、幸福は下位の目的の実現に依存することになるでしょう。「幸福セット（幸福を構成する一組）」の要素としてあるものはI-望ましいものですから、直接的に幸福のために望ましいものはI-望ましいものであるに違いありません。そして、恐らくは前節での私の主張が向かうところに反して、仮に幸福セットにはすべてのI-望ましいものが含まれるということが明らかになるとしたら、その場合には、私たちはどんな目的のために幸福は望ましいのかを見出すことに苦勞することでしょう。

ここまでは、恐らくはこれでよいでしょう。しかし、ここまでは、本当はそんなに進んでないのかもしれない。包括的目的としてエウダイモニアを扱うことについて、ある制約条件が、アクリルによって示唆されています。

最善の生涯の「構成要素」がどのような仕方であるか、あるいはどのような仕方に関係づけられるかについて、アリストテレスは完全に明らかにしていたと主張する必要はない。二つないしそれ以上の独立した目的から、一つの合成された目的を構成するという考え方そのものが、疑念を生じさせるかもしれない。合成されたものは、単なる集合として、あるいは組織化されたシステムとして、考えられるべきであるのか。もし前者だとしたら、エウダイモニアへの移行は些細なことのように思われる。それに、幾つかの善を単純に合計することができるかどうかは、明白ではない。もし後者だとしたら、統一するプランがあると考えられるとしたら、それはどういうものか。²⁾

以上の非常に的を射た問いから、アクリルは、自分の第一の関心はアリストテレスの考え方の正当化ではなくてその提示にあるということを利用して、自ら離れ去ります。しかし、私たちはこの後回しにするやり方を利用することができませんので、アクリルが触れている問題は、さらに追求されなければなりません。

ほとんど不可能な世界Wを想定しましょう。Wには、A、B、Cという三つの、H-望ましいものでもあるI-望ましいものだけがあります。もしそうしたいなら、それらはそれぞれ、名誉、富、美德であると考えることができます。もし一般的に幸福は包括的目的として考えられるとしたら、可能世界Wにおける幸福にはA、B、Cがその構成要素として含まれ、他のものは含まれないでしょう。さて、Wにおける幸福を達成するには、Aを実現すること、Bを実現すること、そしてCを実現することが、必要でありかつ十分であるということを否定するのは難しい、あるいは不可能ですから、Aを実現すること、Bを実現すること、そしてCを実現することを望む人は誰でも、事実上Wにおける

幸福を達成することを望む人であると、人は想定したくなるでしょう。しかし、そのような推論が無効であるとみなすための、格好の事例があると私には思われます。Wにおける幸福を達成することを欲するというのは、Aを実現すること、Bを実現すること、そしてCを実現することを欲すること、あるいは、実際のところ、A及びB及びCを欲することに等しいでしょう。しかし、かなりの範囲の心理的な動詞（「 Ψ 」によってそれを表記します）に関して、「xはAということ（that A）を Ψ する」かつ「xはBということ（that B）を Ψ する」という形の言明から、「xはAかつBということ（that A and B）を Ψ する」という形の言明を導出することはできないとするための比較的手近な理由があります。例えば、私たちがある人について、彼はpを信じていると言い、また、qを信じていると言うことは望むのですが、彼はpとqの両方を信じているとは言いたくないという状況があるとするのは、私にはもっともらしい主張のように思われます。その違いを適用できる最も明白な事例は、恐らくは、pとqが不整合である場合でしょう。私たちはある人について、彼が自分が異様に無能であり、かつ第一人者であると信じていると言うことは望まないのですが、彼は自分が異様に無能な生き物であると信じ、また他方で第一人者であると信じていると言うことを望むということ、私たちは恐らくは想像することができます。矛盾した信念というのは、矛盾を犯している信念ではありません。あるいは、必ずしも矛盾を犯している信念であるというわけではありません。ある人が、pかつqだとは思わずに、pだと思ひまたqだと思ふことはあり得るとする、いかなる理由があるにせよ、それは、ある人がAもBも両方欲しいと思わずに、Aを欲したBを欲することがあり得るとする理由に、映し出されると私は思います。もし私が、ローマでの休日を欲した何錠かの頭痛薬を欲するとしたら、それは事実上、私がローマでの休日と何錠かの頭痛薬の両方を欲することであるとは、私には思えません。

それに、仮に私たちが問題の推論を容認した場合でも、（単純にAを欲したBを欲する結果として）AとBを欲する人は、AとBを実現するために、つまり、AとBを実現することを目指して、Aを欲する（または、Bを欲する）のだらうと、あるいはAを欲する（または、Bを欲する）ことができるとすら、一歩踏み込んで想定することは、正しくないと私は思います。それ故、可能世界Wで、ある人がA、B、Cの一つひとつを欲するということから、彼はAとBとCを欲すると言えたとしても、彼はAとBとCを実現するために、すなわち、Wにおける幸福を実現するために、その一つひとつを欲すると私たちが言えるようになるためには、もっと別の条件が満たされなければなりません。

幸福は「包括的」目的として扱われるべきであるという考えを正当に評価する試みとして、私は控えめな案を提唱しましょう。それは、恐らくは、唯一可能な提案ではありませんが、ほどほどに直観的だと思われるものです。当面の目的のために、可能世界Wにおける「I-望ましいもの」を「普遍的なもの」として分類しましょう。普遍的なもの集合はそれ自体が普遍的ではないことを理解した上で、それらのI-望ましいもの一つひとつを別々に欲するというのは、その構成要素がそれらのI-望ましいものだけからなる集合を欲することに等しいと見なすことにしましょう。そうすると、Aを欲し、Bを欲し、Cを欲するというのは、構成要素がA、B、Cであるような集合（Wにおける幸福セット）を欲することに等しい、ということになります。しかし、「Wにおける幸福」を欲するためには、AとBとCを（セットで）欲することに関して、より強い条件を満たすことが必要になります。そしてそれは、一つの普遍であるような何か、すなわち、Wにおける幸福セットの構成要素となるような普遍だけが含まれている、一つの複合的な普遍を欲することに等しい、ということになります。

私はここで、単により弱い条件をというのではなくてむしろ、上記のより強い条件を満たすための必要十分条件を提示する試みをするつもりはありません。しかし、AとBとCを一つのものとして欲することに関する、ある重要な十分条件を示すつもりです。その条件は以下のようなものです。すなわち、 x が単にある集合の構成要素一つひとつを別々に欲するのではなくて、その集合の構成要素を複合的に（セットで）欲するための十分条件は、彼がその集合の構成要素一つひとつを別々に欲するということが、その集合によって例示されると x によって信じられている、またそれを実現することが x によって望まれている、ある「オープンな」特徴Fがあるという事実によって説明される（その一つの説明としてある）ということです。オープンな特徴というのは、それがどういうものかをはっきりさせるために、それを例示するもののすべてを数え上げる必要はない、そういう特徴のことです。具体例を示します。あるオックスフォードのチューターがかつて、自分の専門に関して、サマヴィル、セント・ヒュー、セント・ヒルダ、レディー・マーガレット・ホール、セント・アンズの各カレッジで教えることを、自ら果たしたいと望んでいました。（彼は二つのカレッジで果たせませんでした。）^{*9} この複合的な願望は、上で名指されたカレッジはオックスフォードにおける女子のカレッジの全体を構成するものであって、要するに彼は、オックスフォードにおけるすべての女子のカレッジで自分の専門を教えるという、オープンな特徴を実現することを望んでいる、という事実に基づくものでした。このような十分条件は、でたらめであったり狂気じみていたりする複合的な願望というのとは区別される、すべての理性的な複合的な願望に関して満たされる（と私は思います）という点において重要です。もちろん、理性的でない複合的な願望は、本当にあり得ます。しかし、私はそれらを区別する条件を特定する試みをするつもりはありません。そして、恐らくは、そういう試みをする必要はないと思います。というのは、もし幸福に対する願望が複合的な願望だとしたら、それは理性的な複合的な願望であると私たちは仮定してもよいと思うからです。

上に示した私の提案は、形而上学的な構成に関する、受け入れ可能な一般原則に適合すると思います。^{*10} なぜなら、私の提案は、普遍ではなくてむしろ普遍の集合であるような種類の事柄に対応する、特定の下位範疇（「複合的な普遍」）に属する事柄が、もともと与えられていた範疇に属する事柄（「普遍」）にどのように付加されるかを規定するものだからです。それはいわば、普遍ではないあるものを「新しい」普遍へと変換することを意味するものです。そして、この変換の目的は、そうした普遍ではないものを、単純で比較的手ぎわのよい仕方で、普遍に適用される原則の及ぶ範囲にもたらしことであると想定することは、合理的だと思われます。「原則」ということによって私は、心理学的、実践的、道徳的理論を含む、さまざまな種類の理論のいずれかに属する、理論的な一般原則を意味していると理解してください。そうすると、そのような原則には、目的に関する願望とか目的に対する手段に関する願望に関連する、多様な原則が含まれるでしょう。

もし幸福が包括的目的であって、しかもそれが、それに対する願望は理性的な願望であるというようなそういう包括的目的であるためには、幸福を構成する要素の集合によって例示されるあるオープンな特徴がなければならないとしたら、私たちの次の仕事は、端的に言えば、その特徴を特定しようと試みることでしょう。その企てを推し進めるために、手段-目的連関の多様性の範囲内であって、特に示唆的だと私に思われる場合のことを、これから考察しましょう。

原註（編者の註）

- 1) J.L.アクリル, 『アリストテレスのエウダイモニア論』（ドーズ・ヒックス講義）, Oxford University Press, 1974, p.5.
- 2) 前掲書, pp.10-11.

訳註

- * 1 第1章については、拙訳「理性と推論」（『文学部論叢』91, 2006, 111-40）がある。
- * 2 編者 R. Warner によると、*Aspects of Reason* は、直接的には1979年のジョン・ロック講義（オックスフォード）に基づくものだが、そのもとになった1977年のイマニュエル・カント講義（スタンフォード）には第5章に当たる部分ではなくて、第5章に当たる部分のもとになったのは別の独立した講義であったとのことである。
ところで、ジョン・ロック講義を実際に聴いた私の知人に、どういう印象を持ったのか訊いたところ、それが何を意味するのかがはっきりとは分からないが、返ってきた答えは‘disastrous’という一言だった。
- * 3 「人間にとっての善」あるいは「人間の善」は、「最高善」とも「行為における善」とも言われる。『ニコマコス倫理学』冒頭（第1巻第1章）において、行為の究極目的がそれであるとされている。
- * 4 エウダイモニアと同一視される、理性的活動の「特別な解釈」としての「形而上学的な観想」については、特に『ニコマコス倫理学』第10巻第7章参照。
- * 5 消費する量を増加させると（2倍消費すると）、それに見合った効果（2倍の効果）が得られるかという、そうはいかない。消費量を一定の比率で増加させても、得られる効果がそれに見合った仕方では増加することはない。
- * 6 グライスのクリケット好きはよく知られている。グライス自身かなりの名手であったらしい。54歳のときに、周囲の予想に反してオックスフォードからバークレーに移る決心ができたのは、満足なプレーができなくなったからだと言われている。
- * 7 「幸福を実現しつつ」あるいは「幸福を伴って」xするとは、xすることにおいて（することによって）幸福を実現することを意味する。「思慮深さを実現しつつ」「思慮深さを伴って」xするという場合と同様である。
- * 8 ハーディ（W. F. R. Hardy）もアクリル（J. L. Ackrill）もオックスフォードのプラトン・アリストテレス研究者として知られている。ハーディはグライスのチューターであった。アクリルはグライスより少し下の戦後世代に属する。
グライスは、エウダイモニアを「支配的な」目的とする場合のことは何も言っていないが、もし「形而上学的な観想」をエウダイモニアと同一視するというのがアリストテレスの最終的な答えだとすると、解釈としては、エウダイモニアを「支配的な」目的とするのが正しいということになるのかもしれない。しかし、アリストテレスのこの答えは、何の含みもないものとは、どうてい思われたい。
- * 9 恐らくは、1950～60年代の話か。その後、セント・ヒルダを除く4カレッジは、70年代後半から90年代にかけて男子を受け入れるようになった。最後に残ったセント・ヒルダは、反対の声を押し切って、終に2008年秋学期から男子を受け入れることにした。
- * 10 グライスの形而上学的立場は構成主義者のそれであることが自身によって表明されている（これに

については、P. Grice, *Actions and Events*, *Pacific Philosophical Quarterly* 67, 1986, 1-35, esp.2-3 参照)。
グライスの言う「構成主義」については、*The Conception of Value* の核心部分の拙訳「形而上学と価値」(『文学部論叢』99, 2008, 73-99) 参照。